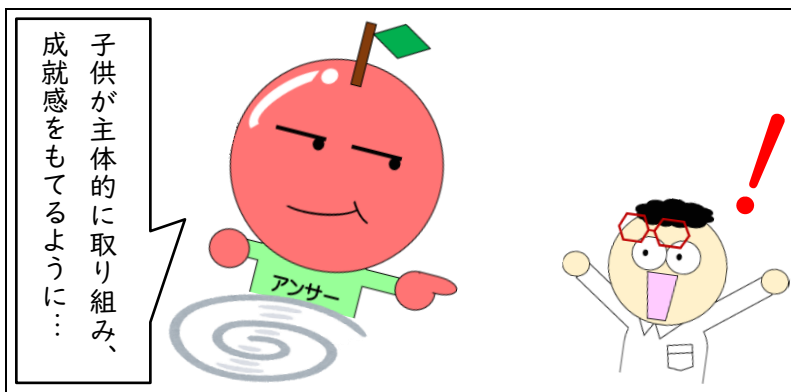
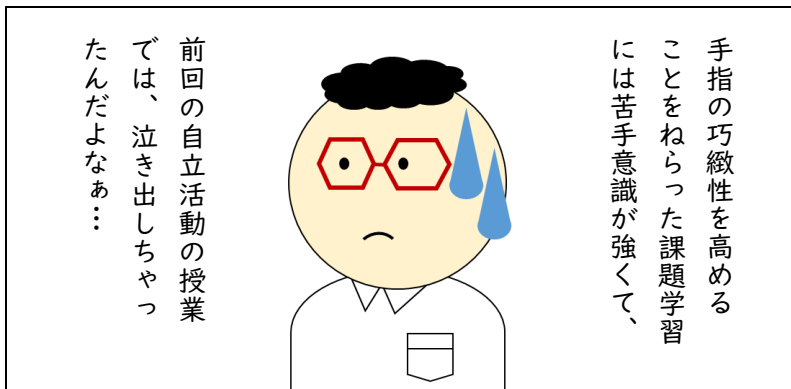
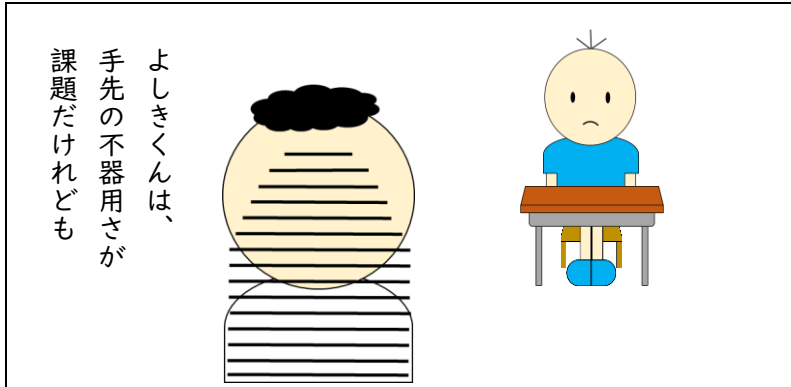


Q13. 子供の苦手な活動に取り組むとき、参加意欲を高めるためにはどのような工夫をすればよいのでしょうか？



「できた」という成功体験の積み重ねを目指して

□ 子供が興味・関心をもって取り組めるような指導内容にしましょう。

例えば、指導の段階を細分化する、興味を引くような教材・教具を準備する、称賛や激励を適宜行うなどの工夫が挙げられます。こうした外的な動機付けから始めて、次第に主体性や意欲を高めるようにすることが重要です。

□ 子供にとって解決可能で、取り組みやすい指導内容にしましょう。

子供にとって余りに課題が容易すぎても進歩は望めないし、難しすぎても意欲を喪失させてしまうこととなります。少し時間をかければできる課題、教師の援助があればできる課題等、難易度を工夫して、課題をやり切って「できた」で終わられるようにします。

□ 子供が、目標を自覚し、意欲的に取り組んだことが成功に結び付いたということを実感できる指導内容にしましょう。

子供が成就感を味わうためには、自分の課題達成の度合いを理解できるようにする必要があります。そのためには、自己評価ができるように課題を細分化し、達成度を分かりやすくすることが大切です。また、わずかな進歩であっても、褒めたり励ましたりすることを忘れないようにしましょう。

自己を肯定的に捉える感情を育てよう

「自己を肯定的に捉える」感情は、自分にもよいところがあると認める感情であり、自己肯定感や自己有能感と言われることもあります。この感情は、一般に、自分のよいところを認められる段階から、自分のよいところも悪いところも含めて自分であることを肯定できる段階に移っていきます。したがって、子供が自己に対してどのような感情を抱いているのかを把握し、成長に即して自己を肯定的に捉える感情を高められるような指導内容を検討することが大切です。

例えば、自立活動の学習に取り組む自分について振り返る機会を適宜設定して、頑張っている自分を確認したり、過去と比較して成長していることを実感できるようにしたりすることが考えられます。

また、子供の意見を取り入れながら自立活動の学習課題を設定することも、障害に対する認識や自分の得意な面及び不得意な面等に対する認識を促すことになり、自己を肯定的に捉える感情を高めることにつながります。

さらに、同じ障害のある年長者がモデルとなって自己を肯定的に捉えていくきっかけになることもあるので、特に中学校段階では先輩の話を聞く機会を設けることも有効な方法の一つと考えられます。



よく一緒に読まれている Q

Q3 「各授業で1時間の具体的なねらいや課題の難易度をうまく設定できません。」

Q21 「子供をほめることを普段から意識していますが、どうもうまく伝わっていない気がします。」

Q26 「どのような指導・支援の手立てが効果的なのか判断できません。個別の指導計画にどのように書いたらよいのでしょうか？」

[目次に戻る](#)